

新津 守(著)

膝 MRI 第3版

評者 江原 茂

岩手医科大学・放射線医学

関節のMRIについて長年にわたって研究・教育の先頭に立たれてきた新津守先生のご著書である『膝MRI』の第3版が上梓された。われわれの本棚で活躍しているこの書籍の初版が出されたのが2002年であるが、その当時から16年の長いお付き合いになる。

その初版は今でもわれわれの読影室の本棚に置いてあるが、2002年当時には膝のみならず関節のMRIを対象としたまとまった教科書はなく、十分な質量の画像と簡潔な記述により日常診療や教育に簡便に使える教材は少なく、英語の教科書が1, 2冊程度存在するだけだった。新津先生は持ち前の研究熱心さを発揮され、簡潔ながらも十分な記述の初版を仕上げられ、それは幅広く迎えられた。さらに2009年には内容を拡充した第2版を出され、そして今回の第3版はそれから9年が経ち、さらに拡充された内容になっている。ページ数では初版に倍する300ページ超となり、さらに相変わらずの質の高い豊富な画像と簡潔だが要点を押さえた記述から、従来の読者にも新しい読者にも期待を裏切らない内容をそろえている。

MRIの技術はこの10年ほどの間にも着実に進歩し、3T装置の大幅な増加により高解像、高コントラストの画像が増え、骨・関節、特に膝関節の画像診断の非侵襲的で有利な診断技術として確立し、診療や教育の場面での高磁場装置の画像が多く使われるようになってきている。今回の改訂の大きな特徴としては、先の版と同様かあるいはそれ以上に質の高いMRI画像が増えた点が挙げられる。さらに今回追加された内容の大きな点としては、関節軟骨描出の技術的側面とリウマチ疾患の章が加わったことであり、整形外科領域にとどまらず、リウマチ疾患の診断からさらにはMRIの技術的側面に至る各領域を含めた内容になっている。また人工膝関節置換後の

ような技術的に難しい問題にも言及されているが、さらには最近の話題であるSegond骨折に関係したanterolateral ligamentと名付けられた靱帯、Hoffa病と呼ばれる定義の十分でない疾患群、AIMM(内側半月板の前十字靱帯への付着)やFOPE(傍骨端線部限局性骨髄浮腫)といった新しい概念など、経験ある診断医でないと扱いにくい項目まで網羅している。

本書は関節のMRIの学習を始めたばかりの初学者・研修医から膝のMRIにある程度の経験のある診断医、さらには整形外科医からリウマチ医まで、膝関節の診断に関心のある方に必要な内容が十分に盛り込まれている。膝MRIの第3版は先の版と同様に幅広い読者層に推薦できる内容を備えている。



B5・336頁

定価：本体6,000円＋税

医学書院刊、2018年